

婦人町議員

第 16 号

1973年1月20日

* 町会議員となつた私

松本きよ子
寿岳章子
阪倉式子

婦人町議員となつた松本きよさん

町会議員となつた松本きよさん の歴史

第二十回例会は、第十号に記したように、船井郡の農村から松本幸子さんに来てもらつてその歩みを語つてもらつた。参会者を感動させるユニークな話で、いわば都會型で、理屈の中で暮すという側にとつてはどうにもかなわないある種の強みにあふれていた。

その幸子さんの話からほぼ一年たつて再び農村の中での人間解放に奮闘するよき人に来てもらつてその今日に至る人生を語つてもらつた。語り手の松本きよさんは、松本幸子さんの親友で、となりどうしでもある。幸子さんは、「熊原の水道運動」がいかに農村婦人の心をめざめさせたかを十分話したあと、その婦人たちの前進が、ついにひとりの婦人町議員を生み出すに至つたと附して話しを終つたが（十号参考）、今回の話し手松本きよさんはほかならぬその婦人議員その人なのであった。司会者の寿岳が、話及びとの討論をまとめる。

母は私に薬剤師か医者になれと言つた。しかし学資の点でそれは不可能であり、次の道として女子師範に入り、卒業し、昭和十六年からののである。私は殿田の五箇庄の小学校につとめた。一方母は朝鮮の財産を売り払つて、もう一つ家を建てた。私は嫁にゆくつもりだつたが、母は分家をさせたがり、毎日けんかの連続、どんな男でもよいから嫁をもらえ

は、祖母との折合がわるく、そのため妻を離別し、朝鮮に来て、総督府の植林の仕事に従事した。日本人小学校二年まで通い、広い海を見、

オンドルであつたまり、時にはシラミがうつった。

父はからだを悪くした。肝臓ガンで五十三才で世を去つた。止むを得ず、母とともに丹波の熊原へひきあげた。くにには姉がいて、養子をとり、問題のおばあちゃんと暮していた。そこへひきあげたのである。大体が今も封建色濃厚なのだが、その頃はもつとも大へんだつた。熊原の庄家筋の家で、祖母はあたりにひびいた「ゴンタバアサン」であり、養子だった義兄は、ひきあげた組が自分の財産をうばわないかーということをひどく気にしていた。朝鮮からなにがしかの金は持つて一かえり、帰つてからは果樹園等をして、経済的には困ることはなかつた。しかし、ひきあげても兄たちの家には入れてはもらえず、バラツクをたててそこに母と住んだ。精神的には苦しい日々で、母は気がねばかりの中に苦労を重ねた。しかし、私は兄に怒られながらも、そしてかみつきながらものびのびと楽天的に成長した。

母は私に薬剤師か医者になれと言つた。しかし学資の点でそれは不可能であり、次の道として女子師範に入り、卒業し、昭和十六年からののである。私は殿田の五箇庄の小学校につとめた。一方母は朝鮮の財産を売り払つて、もう一つ家を建てた。私は嫁にゆくつもりだつたが、母は分家をさせたがり、毎日けんかの連続、どんな男でもよいかから嫁をもらえ

れば、食いそこないはなかろうということで養子に来たといふ顛末であった。

しかし「養子」というものは徹底的に辛いものである。「区」は養子に対してエゲツなくふるまう。何かにつけて、「養子のくせに」「よそから来て」と批判をする。母はその村の人の批判を一々気にし、私から注意をさせようとする。言えば夫は怒り、私に自分の味方をさせようとする。私は板ばさみであった。「養子は黙れ」というし

だいで、区のさまざまな仕事でもあとから始末ばかりさせられるし、府につとめていた夫ではあつたが、二度ばかり実家（丹波町）に帰り、自分が迎えに行つたものであつた。辛い月日で、その頃の日記を見る

と「又お正月。苦しい一年がはじまる、何の希望もなく」というように記している。

しかしその中に少しほも区の事情もわかり出すし、生活もある種の安定を示しだしたが、兄にはとことん苦労した。兄にしても養子の苦しみはあつたのだが、とにかく常にトラブルが多かつた。農地解放で買った三反の田を耕すのに必要な「稻木ヘイナキ」や竹をとりにいっても何にもくれずわめかれるだけ、ではといふのでこんどはお金を出してよそから貰えば、それはそれで又何故家へ来ないかと怒られる。私は母に、何故嫁にしてくれなかつたと恨みつけ、夫にも不満だらけ、昭和十三年の母の死までそりした月日がだらだらつづいていた。ただ、子どものために夫に「イナレタラ大へん」ということだけが教員をしていたといふことであった。

昭和三十六年、二十年間の教員生活をとじた。私の第一の人生は第二の人生へと転換しつつあった。私は二、三年で止める気で気がるに

農協婦人部長となつた。川辺の農協婦人部は既に相当評価される意欲にみちたグループであったが、私はそこで皆といっしょに勉強をし、新たに「嫁の辛さ、苦しみ」を学んだ。男と女の差別は私はこどもの頃からすでに十分感じてはいた。お前は女だ、男だつたらなあということばの中で常に生きてきた。先生になつたらなつたで、母は「電信柱にでもおじきせい、お前は女だから」という。家庭生活も男と女の差別は常に意識させられた。

「生活教室」に入つて、やがて私はそこの「かなんことはかなんと言う」というスローガンの純粹さに元気づけられた。だんだん私もものを言えるようになつた。おそろしいうるさい兄にはなかなか言えなかつたが、それも少しずつ言えるようになつた。

又、子どもたちを戦場に送つたことについても深く考えるようになつた。知つてゆこう、知つたことを言おう、言いたいことを言おう。私はそういうくらしに入った。しかし「言つた」ことについての手強い反撃は直ちに男からやつてきた。「あれはアカヤ」

言つことの辛さ。権力者は言えは叩く。しかし「何でも言うことがどんなに力になるか」を知つたところで、熊原の水道設置運動がはじまる。川の水くみの辛さを訴える若嫁さん。しゃーないというあきらめ、金もないのに出来るかといふ居直り、この中で、やはり次の世代のしあわせのために黙つていてはいけないとの思いが高まる。

結局水道の運動は女がものを言つ運動であった。金もないのに女はあつかましいことを言うといふ非難の中で、私たちはもの言いをはじめ。婦人会の時だけはものが言えるが、男がいる会合ではもう言えない。第一家で言えない。「みんなムコサンつれどる、そのムコサンに知つてもらお、水くみも手伝つてもらお」こうして、生活改良グル

一オ、婦人会、母親大会と、あらゆる会合に言つてゆく運動がひろまつた。署名運動、紹介議員の獲得、しろうとにほども辛い運動であつた。一方どんどん水はなくなり、筆舌につくしがたい苦労はつづく。

女は錢のつもりせえ、錢どないすんのや、ありとあらゆる悪罵の中で運動は進んだ。ついに女が先頭に立ち、府へ出かけ、副知事に会つて即決で水道がつくことになり、費用も各戸三万円、それも女たちが穴を掘つて労力を出し、一万八千円の出費でついに四十三年四月竣工をみた。婦人の力で出来た水道だが、男たちは最後までそれを言うといやがつた。

婦人議員がどんなに必要な存在なのか、この水道運動の時私たちは身にしみて知つた。私は十七才の精薄の子どもがいる。主人もつとめを持ち忙しい。とても出にくい状況であつたが、一月の煩悶の末、とうとう出ることにきめた。決定に至るまでの夫婦のすさまじい話し合ひがつづいた。そうして票あつめの苦労、部落総スカンとのからみあい、そういうものとのたたかいの果て、勝利が訪れたが、考えてみれば何とも女ばかりの力で勝つたと思う。当選後今ちょうど一年半たつた、

熊原のそれが、純粹な女のたたかいであつたとすると、次に出てくるのはその反動としての、「女がなにも先頭きつてやることはない、男がやってやるから後ついてこい」であり、次にはもっとも悪質なものとして、上からの恩恵の如くさつさと水道を敷設し、地域住民やとりわけ婦人の運動を封じるという手を使う。それぞれ実際におこつた由である。

なお、おきよさんのように、いわば農村のインテリ的生き方をした人が、見合い後一ヶ月で、かなり簡単に結婚し、苦節何十年という形どうするのだといふことまで含めて。そんなことは大したことではないが、男と女の考え方のちがいを埋めてゆくことはほんとにむずかしい。男はすぐにわかつたと言い、くどいと言うが、言わなければわからぬものがあることを中々知ろうとしない。暮しの中から考えた純粹な女の思い、策を奔しない女の強さ、とともにかくにも暮しに根づく女の願いをもつともつと男に分らせるには、婦人議員の力が絶対に必要だし、その婦人議員をしつかりさせるのはたとえば私の

のころはようやく主人と討論が出来るようになった。これからはいわば私の第三の人生がはじまるとしているのである。

以上のおきよさんの二時間近い話のあと、前の幸子さんの話と同様、みんなはいさゝか圧倒されてしまつた感があつた。みんなが、自分のくになどで知つてゐる農村婦人のあり方などと全くちがつた強烈な生命の吹き出るような人生に目をみはる思いだつた。なお、熊原の水道開通以後、同様の状況にある周辺の部落の水道獲得運動がどうなつたかについて、きよさんは非常に示唆深い分類をしてくれた。

元が最初は色々女が議員になることのむずかしさを説いた。酒の席はどうするのだといふことまで含めて。そんなことは大したことではないが、男と女の考え方のちがいを埋めてゆくことはほんとにむずかしい。男はすぐにわかつたと言い、くどいと言うが、言わなければ

アメリカ――

忘れえぬ婦人たちのこと

阪倉式子

一九七一年六月から七二年九月まで、一人の女子留学生として異国で生活して学んだことの一、二をかきとめておきたい。

アメリカを実際に見た日本人は、今やぼう大な数にのぼるであろうし、いろいろな経験をした人もすくなくないだろう。そういう中で私の短いせまい範囲のアメリカ生活を報告するのはおこがましい思いがせぬでもないが、この一年余の期間が生涯忘れられぬ大切なものを私の中に残してくれた喜びだけは、つたない文章だがかけておこうと思う。

アメリカでの生活がはじまつた最初の日の午後、私は客をむかえある台所で皿洗い機や冷蔵庫をこつそりあけてのぞいてみたりした。巨大な肉のかたまりにギヨツとし、戸だな一杯にぎっしりつまつた力ンヅメに圧倒されてしまった。

「子供が三人と大人が私達をいれて六人」というママの言葉にディナーのテーブルセツトもなれぬ手つきで用意し、六時に五人の客をむかえた。まつ黒の膚にまつ黒の大きな眼をキラキラさせて、三人の男の子は紹介された私のそばへ近寄ってしつかり手をとった。母親の一人は看護婦になる勉強をしながら働いている三十才すぎの女性で、ルビーとよばれるもう一人は教師になろうとする五十才に近い六人の子どもの母親だった。G・Gはこのルビーという女性と大の仲良しで、ことの他うれしそうにゆり椅子から身をのり出して話に夢中だった。

病理学者のパパと黒人学校チユーティー提唱者で、みずからもチユーターとして黒人小学校に勤めてらしたママと、八十七才になるG・G（ママのお母さんでGreat Grandmotherの略で愛称だった）の三人家族の家へ私がむかえられたのは六月の暑い夕方だった。大き木々にかこまれ、リスや鳥のさえずる静かな住宅街で、私の東部ニュージャージイ州での二か月半にわたる生活がはじまつた。アメリカ合衆国の中で一番目に黒人人口の占める割合のたかいニューアークNewarkという町が、ドライブで二十分の、いわゆるダウンタウンdown townにひろがり、町のゆるやかな斜面は上流、中、下流、黒人・移民街をはっきり分断し、上部の大きさはそのまま黒人・移民街のひろがりを示していた。

自動車をもたないこの五人の客を、黒人街の自宅へおくつたが、國

四時間は話しただろうか。私はそのニューアークの町が一九六四年の全米黒人暴動の際、かなり大きな動きのあった町であることを知った。道路の舗装工事がやっと来年おこなわれるようだとか、自分たちのアパートはようやく立ってほつとしたが、警備員をもう何名か増やさなくてはまだまだ危険なのだ（黒人街と移民街は非常に仲が悪く、たえずごたごたおこつているといつーなど、話は切れることなく続いた。十二時に近づいたとき二人の婦人がどちらからともなく、「とにかく自分たちの時代とちがつて、せめてこれから子供たちが人間として愛し愛される状況に生活させたくて」と、いとおしげに子供たちを見守りながら言ったその声は静かで深いひびきをもつていた。

道を横ぎると黒人街がはじまり、道路はアメリカのそれとはとてもおもえぬデコボコ道となつて続いた。深夜の町は異常なさわがしさで、老人が泥酔して道に横たわり、ヨチヨチ歩きの赤ん坊が小学生・中・高校生のいりまじつたグループのあとをはだしでうろうろする姿などが、あちこちでみられた。玄関から道路にむかってはり出した木造の階段にうつろな眼をして坐りこむ女子高校生はあと何時間あの状態をつづけるつもりなのだろうか。むやみに多い花嫁衣裳店の白いドレスが今もあざやかに目にのこっている。車をおたりた一人の婦人は附近にたむろする子供たちを呼びあつめて、「さあ、もう家へおかえり」としきりに手で合図をした。ママとパパに感謝の言葉をのべたあと、ルビーは私の耳もとに

「これからアメリカでの生活が神に祝福されたものでありますよう」

「すばらしい思い出をもつて日本のママのもとへかえるように。」

と、はつきりわかりやすい英語でさとすようにささやいた。そしてその大きな腕でだきしめてほおずりをし、おやすみなさいのキスをして立ち去つたのだった。この婦人は一年をへて東部にもどつた私の前に

すでに教師としてあらわれ、すぎ去つた一年の月日を感概深いものにした。

帰宅した私達をむかえたG・Gは、私のアメリカ到着以来はじめて「アメリカ」という言葉をつかってこう言われた。

「これから式子はこのアメリカで私達と一緒に暮すのよ」

二か月半後の九月に東部を去る日まで私は大部分の時間をこのG・

Gとすごした。ニューヨーク・タイムズの大學生記事を知してくれ

れるのも、英語の発音をたのしげに正してくれるのも、料理を教えてく

れるのも、すべてこのG・Gだった。私は彼女のために近くの図書館

から、毎週五、六冊の本を借り出したり動物の世話を手伝つたりした。私にとって一番たのしい時間は、夕方から夜にかけてのG・Gとの夜話で、毎晩あきることなく話す私たちをみてママとパパはおどろいていた。昼間見学した地域の黒人学校、白人学校についての報告と感想を私が話すと、G・Gはそれを注意深くきき、そんな実態は知らなかつたと驚かれたり、私の疑問に答えたり自分の意見をくわしく述べたりされた。ハーレムには一度も行つたことがない方だったので、私が見てきた日は首を長くして待ち、翌日になると以前読んだことのあるハーレムに関するといろいろな本を、ママの本だからひっぱり出して読んだりされた。テレビでニクソンがベトナム戦争の演説をすると、私にこまかく説明したあと、大うつしになるニクソンにむかつて大声で「グッドバイ」と言ってゆり椅子に身を倒してしまわれる様子も本当に愉快なものだつた。そして必ず、ケネディの後半からジョンソンニクソンにいたるアメリカのこのありさまはどうしたことかとなげかれて、ベトナム戦争に関しては消耗しきつた様子で毎日その徹底した終結をつよい調子でくりかえされた。

G・Gの友人に関連した話でよく話題にのぼつたのは老人問題だった。のちに西部で私は三つのことなる老人コミュニティを見たが、

そのどれもが余りにも美しい反面、孤独が絶対のものであり思のつまるおもいがしたものである。老人同士の交流設備は申し分のないものだが、私をすっかり考えこませたのは、若者、幼児から全く断絶させられた社会である点だった。それは本当に奇妙な社会で、「太陽の町」とか「白鳥の湖」という呼び名がいっそうむなしの感じをさそつた。

G・Gの多くの友人は、老人ホームに生活する人々であり、G・Gも八十才になればホームに入るつもりだったが、パパとママがG・Gの

ために部屋をつくつてむかえてくれたのだと話された。看護婦として

だ。

病院で働き、結婚して三人の子の母親となり、一九七一年の夏には四人のヒ孫の Great Grandmother であった。その夏の一日一日は私とG・Gとの間に急速な親しさをつくつた。東洋人と出会つたのなものとして毎日を暮した。誰もいない午后には二人でG・Gの秘密の箱をとりだして古い手紙や写真を見ながら、私はG・Gの想い出話に耳をかたむけたものだった。

「私の主人は死んだらその灰をメキシコにまいてほしいという希望だつたから、私たちにお墓はないの」

といりG・Gの言葉は、かすかな驚きとともに私の中にある種の感動を残した。八月の半ばに病気になられ、救急車の中で若い看護人を大笑させながら病院に運ばれたG・Gは、その病床生活でもたくさんの友人をつくり、私がニュージャージイ州を出発するころにはもと通り

とはいえなかつたが回復されて、私たちは又一緒に残り少い日をおくつた。出発の日夜八時のバスにのる予定の私は新しい生活への期待と、このG・Gとの別れをおもつて複雑な気持だつた。出発の五分前、私はG・Gの前で小さな子供のように立つていた。G・Gは私の顔を両手でそつとつぶんで言われた。

「私たちはこの上ないたのしいすばらしい日々をおくつたわね。本当にありがとうございました」

あとはお互に言葉にはならなかつた。翌年の五月の母の日に、私はママからG・Gの死去の知らせをうけとつた。『G・Gはメキシコでなくともよいから、海にその灰をまいてくれるよう私達にたのんでこの世を去りました』手紙を手に、私は一人の婦人の死を心から悼ん

西部へ移動した私は、カリフォルニアのクレアモント大学院の教育学部に入り児童文学を専攻した。児童文学の先生で図書館員のMrs. Ragsdale を通して私は児童文学の世界を知り、この婦人とは公私両面でたやすく交わり、私たちは本当によい友人となつた。泥沼のよう混亂したアメリカ社会で、私はこの先生の存在を何よりも力強いものに感じ、信頼した。現代のアメリカ児童文学が、さまざま問題を追求しながらもなお、眞の創造と喜びを支柱としてもちつづけているのは、底辺にしつかり働くMrs. Ragsdale などの力によるものにはかならないと考える。あきらめや孤独の表情を、多くの学生はこの先生の前で消し、眞実にその悩みを語つていた。すばらしい御主人の協力のもとで、この先生は常に若々しく、児童文学という仕事に生きつつ毎日をたのしくすごしてらした。

私のすごした一年と三か月はいろいろな人々との出会いと別れであつた。ここでとりあげた三人は、他の多くのすばらしい人々の中でひとときわ鮮明に心に残り生きつづけている人々である。とくにえらんだつもりはないが三人とも女性になつてしまつた。離婚して新しい生活にふみ出した黒人の母親と、八十八才にしてこの世を去つた古きアメリカの良さをかねそなえた英國系のおばあさんと、人種、世代をとわず生命を何よりも尊いものとする児童文学を、社会的、教育的にひろめようとする教師と、三人は全くちがつた生活と人生をもつた人たちだつた。名のある特別な人々ではなかつたが、私の心にはその名をとどめて永久に忘れられないものを残した人々だつた。それぞれに愛情

あふれた人たちであつたことも私にとつてどんなに幸せであつたことか。

冷たく広がる巨大な国アメリカを、ほんの短い期間だつたが内側からながめてみて、表面的なことがらのみでない深い部分でアメリカをゆさぶつているもののが何がある気がしてならなかつた。アメリカの社会に関する書籍や新聞にみられるように、山積した問題を未解決のまま残し、手のつけられぬような状態も数多い中で、その社会を構成する人間がくずれはじめている点がとくに強烈な印象として私の中に残つてゐる。帰国して九か月になろうとする今、私はやはりとても少数のすばらしいアメリカ人めぐりあつた気がしてならない。

司会者から感想ひとこと

阪倉式子さんの報告をきいてからすでに一年近くたつ。会誌への原稿がおくれたのはひとえに司会者の責任である。阪倉さんと会員の皆さんに深くおわび申し上げたい。

阪倉さんのアメリカにおける留学生活はなみの観察者ではえられまい収穫を彼女と私たちにもたらしてくれたと思う。例会での報告は、黒人街の実態や黒人学校の生ま生ましい様子が虚飾なく語られ、私たちが概念的に知つてゐるアメリカの恥部について、具体的な認識が与えられるものであつた。病めるアメリカという言葉があるけれど、何

-7-

がどう病んでいるのか——公害とスマツグで呼吸することさえはばかられるような状況の町の中で人々は怒ることを忘れ、ただひたすら室内でじっと息をころして耐えている——人間のたましいが病みくずれてゐるのだとということを彼女は熱心に語つてくれた。公害にさわぎた

てる日本にはまだ希望はある。そうでありたいものである。

阪倉さんはまた、アメリカが何故かくも病みくずれるような状況にをちいたつたかについても、鋭い観察と問題提起をした。一つはアメリカのベトナム戦争へののめりこみである。この点はかなりの人々の指摘もあるし新しい意見ではないけれど。それと併行して進行した巨大産業の消費生活全支配が人間をむしばんできたという観察はきわめてユニークである。カンヅメとハンバーガーの単調な画一的食事は、彼らから食の文化をうばつた、食の文化を失うとき、その国の文化はくずれ人間はダメになっていくという彼女の観察は人間の生活と文明、あるいは人間の幸福といった問題にまで深くひろがる契機をふくんでいて、大変もしろいものである。それは老人問題、セツクス問題教育問題などともかかわって我々自身の問題にまでつながつてゐる。アメリカの病気はよそごとではないのである。

本誌にのせた原稿は例会での話では多く語られなかつた三人のすばらしいアメリカ女性についての、頌歌ともいはべきものである。私たちもすればいまわしいアメリカ像にわざわいされて、このようにさわやかに美しく心わかちあえる人びとがアメリカの中にもいるという事実を見失いがちであるが、彼女のすばらしい友人たちもまた私たちの友人もある。このようなすぐれた部分のアメリカが、いつかはアメリカの全体像になりうる可能性へも夢をえがきたいものである。

(第三十一回例会 十二月十五日 於婦人センター)

出席者 十五名 審久美子記)

編集後記

○一昨年の例会の報告を今ごろお届けするのはたいへん心苦しく申し訳ないことです。十一月例会報告者の阪倉さんには、ご家族の病気やご本人の卒論などが重なり、そのお忙しいなかで、ようやくまとめていただいたものです。その間、当日の司会者であった寛さんにはずいぶんのご尽力をしていただきました。

○会誌は例会二回分で一号にしている関係上、十一月例会報告も一緒におくれてしましました。こちらの方は例会直後に原稿をいただいており、松本さん、寿岳さんにたいへんごめいわくをおかけしました。

○このような事情のときに、例会二回分で一号出すという臨機の処置をとれなかつた編集担当者（藤井）の不明、非力を深くおわり申し上げます。

一九七三年一月二十日 印刷発行
「婦人問題研究」第十六号
発行者 京都市左京区下紫半木町 京都府立大学寿岳研究室内
婦人問題研究会

電（〇七五）七八一一三一三一
振替口座三一八一七